



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第五十三号（一日発行）
平成六年二月一日

北海の古平風土物語 (十九)

鯨呼び込みのへ神鳥・鷗

高橋 源 五口

毎年春の三月、鯨漁の準備が出来上がった中旬になると鯨呼び込みの「神鳥」といわれる鷗（かもめ＝保護鳥）の大群団が古平川原に渡って来る。

この群団は三、四千羽以上であつたろうか。白い雪がまだ消えやらない広い川原は、この鷗の群れで黒く見えるほど、鷗に埋めつくされていた。

*飛んでいる鷗は白く見えるのだが、止まった時は羽の先に黒い斑点があるので、黒く見えるのである。

海が凪た日の夕方には、いっせいに川原を飛び立ち、大群団で空を覆い、沖合いに向かう。その時の鳴く声が「コンニヤ、コンニヤ（今夜、今夜）」と聞こえる。大群団になると、これが特に大きく響き渡る。翌朝が鯨大漁の前夜だと、きまつてよ

く響くようである。浜の衆はこれを聞くと、「鯨の群来は今夜だ、きつと鯨の群来がある」と意気こむ。

夜明けまでには沖合いから引き上げて、ひっそりと、また川原に帰って休む。時化の日には沖合いに飛び立たない。

好漁期の四月下旬ごろまでとどまり、漁の終わるころになると、北方の奥場所（留萌・宗谷利尻方面）に渡って行って、残る数は少なくなってしまうのである。

当時、三月下旬のこと、古平川尻で「神鳥・鷗釣り」をした不逞の者がいた。鯨漁場に東北地方から来た漁夫であつた。川尻で、鱈釣針に大きな魚の餌をつけ、太い綿糸で流し、その端を橋脚に縛りつけておいて

掛かるのを待つ。釣針に掛かった鷗は、水面をパタパタと飛び回る。これを見ていて、磯船を漕ぎよせて数羽も捕殺したのである。番屋での鍋材料として酒盛りを企んだのである。

「スワツ 一大事！」と、この「神鳥・保護鳥鷗」捕殺の知らせは駐在所に伝えられた。「コリヤ一大事」と、番屋に飛んで来たお巡りさんは真っ赤になつて怒り、捕殺した漁夫たち

「六又目物のマシ」と

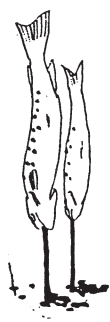
アイヌとの物々交換

アイヌの人たちが交易をするには会所に行く。もし煎海鼠（いりこ）百本出して、「アブラシャケ」と望めば、清酒三盃（一盃はコップ二杯半）また、「ヤ・カン」と望めば、耳環一提（さげ）を渡した。

「タンバコ」と望めば、煙草一把に付煎海鼠百五十本であつた。米を「アママ」と言い飯のことを「シユケアママ」、にがり酒を「シラクコルシヤケ」、皮針を「ルエケム」、小針を「カネケム」、

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

とその親方は駐在所に連行されて行った。十分に油をしぼられた上に、保護鳥、捕殺ということで重い罰金刑を科せられ、死んだ鷗を丁寧埋葬させてこの件は落着いた。町民みんなが、鯨に頼っていた時代の話である。



紺木綿を「センガキ」などと言

- 曹谷（宗谷）辺りでの一般的な交易値段は次のようである。
- 米一俵（八升入り）付
- 鯨 六束（千二百尾）
- 煎海鼠 五百
- 鮭 五束（百尾）
- 鱈 十五束（三百尾）
- 干鱈 六束（百二十尾）
- 鱈（数の子）二斗樽三樽
- トド皮 一枚 など
- 会所には五十人程も詰めかけ、それぞれの品を受け取って行く。あまり混雑すると「シココライ、シココライ」と叫んでは、外へ追出だしていた。

すけそ漁の発展に この先見性あり

郷土の古いことなら何でも書こうと思っっている私には、時々思わぬ話が舞い込んでくる。しかし、なにか書くとなると、責任上若干の調査も必要で、より正確にと、あれこれ資料を集める。知らない間に大分古い書物なども集まってきた。

今回はひよんなことから『古平信用金庫四十周年記念誌』が目止り、随分と古平の産業の

役が、初代理事長梅野富蔵氏であった。漁業に活路を開くべく組合員に貸与利用させるため、発動機船の建造に意を決した。「やがて古平港に十隻の漁船が

次々と浮かび、町民の歓呼を受けた時の感動、感激は忘れられない」と、記念誌の中で述べておられた。

当時一隻の建造費は三千円であり、民間での産業資金としては膨大であり、胸躍る快挙といわねばならない。あの電機の松下幸之助に劣るものではない。沖合いすけそ漁業の先駆、先達

故郷を想う 福井孝平

あれこれ楽しく読ませていただいた。この分野は私の専門外で、筆にするためらいもあったが、例のやじ馬根性で少しばかりふれてみたい。

古平といえば鯨で栄えた町であるが、ご承知のように大正末からボツボツ凶漁のきざしが見え始め、町の経済もあやしくなつて、新しい魚種・漁法、即ち沖合いの魚田開発へと目が向き始めたようである。その火付け

者として、改めて敬意を表したい。私の知る限りでは、大分お齡を召され、いつも理事長室でウトウトと居眠りをしていた記憶ばかりで、年代も離れていたせいか親しく言葉をかけていただけなかつたが、大人(たいじんの)の風格が漂っていた。

今生きておられたら、いろいろと勉強をさせていただけたのに、と悔やまれる。紙面がなくなつたので、いつ

古平場所と岡田家

―一代で岡田家の基礎礎を築く―

福山での商売は努力のかけがあつて順調に進み、町内に支店

を出すまでに繁盛した。一介の行商人であつた弥三右衛門が、このように成功するまでには並々ならぬ苦勞と、また優れた商才があつたからであらう。

商売が発展すると、それによつて彼の商人としての意欲はますます燃えた。

彼は藩の調進方として、藩主や藩士に用達をするほか、時には金を融通してやり、その精算として、藩主の領地や藩士の知行場所からの産物を本州方面に輸送して、それを販売して利益を得ていた。

しかし行商から身を起こし、一代で大きな身代を築いた、初代・弥三右衛門玄秀は、慶安三年五月二十五日(一六五〇)、

かまた詳しく書いてみたいと思ふが――

中国に「井戸を掘つた人の恩を忘れてはいけない」という教えがある。

八十三歳でこの世を去つた。

その後松前藩では、これまで続けていた藩士による場所の経営が思わしくないので、場所の経営を商人に任せようという事で場所請負制に代り、岡田家では運上金を出して、直接場所交易を請け負うことになつた。そのとき、岡田家が請け負つた場所が古平なのである。当時の知行主は誰であつたかははっきりしないが、文書に出てきた最初の知行主が新井田喜内という藩士である。

ずうと後になつて、岡田家の書き残した文書の中に「私商場所フルヒラ」とあり、「海陸とも我家の開拓」と当時の苦闘のあとを述べ、「ヲタルナイより一層早きよう」と、場所請負を始めたその時代の古いことを書き記している。

※ヲタルナイは現在の小樽の語源となつていて、その場所は今の町名からは特定できないが、小樽内川下流付近が中心といわれている。

一兵卒の軍隊日記

〈5〉

馬にビンタ？

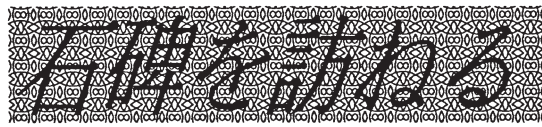
を食らわす！

本間 銀朔

肩章も付けていない古兵さんに別室に連れて行かれ、「これを書きように」と言われた。馬名札というのだそうだが、六センチ×二十センチ位の板に黒うるしを塗ったものが五十枚程机の上に積んである。馬の名が変わったので、これに新しい馬の名を書くのだという。今までいた馬が出征したのだろうか。道具は筆一本と白いチョークが用意されていた。皿にチョークを入れ、それに水を加えてすりつぶし白い液をつくり、それで馬名を黒い板に書いた。緊張しながら一日かかってようやく書き終えた。

昼食は、班にいる時は飯ごうに半分しかなくいつも腹ペコだったのに、ここでは飯ごう一杯もあり、軍隊に来て初めて満腹感を味わった。この古兵さんは温和な人であった。使った筆と道具を洗って返し、夕方班に帰った。

次の日は既当番だった。自分の書いた馬名札が馬の入るとこ



魚霊碑

題字揮毫・町村 金五
文と書・佐々木孝泰

古平漁協の建物の北側に建っていて、よく目にする碑ですが、書かれています『建立の由来』を改めて読むこともないと思われ、その全文をここに紹介します。

千古を誇る蝦夷地の開拓は海道に始まり、魚族に生きる人々に因ってその一步を踏み出した。古平もその如く遙かな波路を越え、この地に生

活を遂げた先人に因って海田の扉は拓かれた。以来風雪を重ねる事百年今や日本海は言うに及ばず遠くオホーツク海、アラス力周辺の海域に船出して今日を築くに至る。我等が子孫又万里の彼方に飛躍するを憶い、今日あらしめた先人を偲び、豊漁を齎した魚霊を祀り魚族の尽きる事なきを祈願す。

が、馬にはあまり接したことがないので恐る恐る仕事をしていない。誰かが「馬ほど人を見る動物はいない。気合いをかけておくといい」と教えられたので、態度を大きくし、「アゴトリ」を一発くわしてやったら馬も案外おとなしく、やっと当番を終えた。既当番は飯がたくさん食えるというので、志願者が多い。本当に飯ごうに山盛りだった。夜中にも食べたが、既当番は悪くないと思った。だが既当番はこれ一回しか当らなかつた。後

で聞いた話では、馬に蹴られた者と、肩を噛まれてけがをした者がいたというので驚いた。四月一日になった。初年兵が相当数入隊してきたようで、馬糞などを片づけていると「古兵殿」と言われた。自分らは肩章も無くあまり上等な服も着ていないが、顔を見ると若くはないので、きっと上等兵ぐらいに見えるたのかもしれない。

新しい入隊者はみんな若く、白いつなぎの服を着て元氣よくきびきびしていた。この人たちは間もなく千島方面に行ったのか、その後見かけることはなかつた。

ある日、五、六柱の遺骨が無言の帰隊をした。隊の全員が門の前に整列して出迎えた。遺骨は白布に覆われ、下士官の胸に抱かれて入ってきた。弔慰のラッパが鳴り響き、緊張した場面を目にした時は何とも言われぬ気持ちになった。

われわれも何時かはこうなるのか――。

茲に古平町開基百年を記念し之を後世に捧ぐ。
昭和四十三年九月七日
古平漁業協同組合建之

ふるさととの群像

- 4 -

若くして逝った大衆詩人・作曲家

— 武内白雨 (本名眞之) さん —

古平町で詩人といえ、余りにも有名な吉田一穂という大詩人がすぐに思い出されますが、大衆詩人として、作曲家としてその才能を大いに發揮した人がおります。時の郷社琴平神社の宮司であった武内白雨(本名眞之・たけのうちまさゆき)さんです。

大正四年七月一日古平町に生まれましたが、昭和十二年二月二十七日、惜しくも若くして亡くなられました。

当時良く知られ、今も残されているのは、古平小学校開校六十周年記念式歌です。

記念式歌

- 一、菊咲き薫る秋の日に
校史輝く六十年
我が学び舎の喜びを
今こそ祝へ諸共に
- 二、学びの庭にいそしみつ
玉と磨かん我が身なれ
迎へて嬉し記念日を
今こそ歌へ諸共に

記念式典当日は、この式歌を声高らかに歌って六十周年を祝い、在校生は紅白のまんじゅうを貰って大喜びでした。

白雨は、当時すでに作詞家として名を知られていた高橋掬太郎とも文通をし、また面識もあ

【今日日はこんな日】 選挙違反で選挙粛正祈願祭 琴平神社で候補者らが宣誓

[昭和11年]

選挙違反が問題になるのは今も昔も変わりがありません。特に昔は選挙に慣れていないこともあって、違反も白昼堂々と大手を振ってまかり通っていました。また、違反をしても、選挙に限っては悪いという觀念が無いことも、違反が無くならない理由のひとつだったようです。

大正十四年の選挙までは戸別訪問が許されていたこともあって、買収は絶えませんでした。昭和七年の町議会選挙では、磯部署長が候補者を警察署に集め、選挙違反について取り締まりの注意を伝えました。ところが選挙後買収による違反が見つかって、取り調べを受けた一人が神経衰弱になり、それが原因で死去したのではないかと、という不幸なことがありました。

次の選挙が行われる昭和十一年、町長職務管掌谷川喜市は、前回のような事件を未然に防ぐため、候補者、町会議員、部落会長らの出席の下、選挙粛正祈願祭と宣誓を琴平神社で行いました。

投票は五月十九日に行われ、次の十八人が当選しました。

- 高野勇次郎 齊藤兼太郎
- 吉野 金治 種田健之丞
- 越中 庄七 藤田 秀雄
- 佐々木孝泰 田岸 藤吉
- 齊藤 林蔵 大沢吉三郎
- 渡邊幸次郎 中野 雅栄
- 山口 正治 本間 愛蔵
- 田中吉太郎 横山 隆起
- 梅野 富蔵 木村誠四郎

りました。あの有名な古賀正男作曲の『酒は涙か溜息か』の曲を聴いて、「私の作曲した曲によく似ている。先を越されたか」と、残念がっていたという事です。

一、風になよなよ青柳
君と二人で出てきて街だ
愛と希望の明るい胸を
抱いてたのしく語った街だ
二・三小節 略
(昭和十一年四月作)



鳥籠